

### 第3回 佐久地域の高校の将来像を考える地域の協議会

日時：令和元年12月25日（水）  
午前10時00分～12時00分  
場所：佐久市役所議会棟全員協議会室

#### 1 開会

#### 2 あいさつ

(柳田座長)

本日は、お忙しい中ご参集いただき、誠にありがとうございます。

本協議会は、佐久地域の将来を見据えた高校の学びのあり方について協議し、県教育委員会に意見・提案することを目的に設置しております。

前回の会議では、関係機関の意見等について聴き取るとともに、具体的なテーマに沿った意見交換を実施しました。それらを踏まえ、事務局において「佐久地域の高校の将来像についての意見提案（案）」を調製したとのことですので、本日、これについて意見交換を行いたいと思います。これにより、当協議会として県教委に意見提案していくこととなるものでありますので、委員各位の忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。

#### 3 意見交換

「佐久地域の高校の将来像についての意見提案（案）」について

(柳田座長)

それでは早速、会議を進めてまいりたいと思います。

次第3「意見交換」の「佐久地域の高校の将来像についての意見提案（案）」についてです。事務局から資料について説明をお願いします。

(事務局 若林佐久市企画課長)

資料に基づき説明

(柳田座長)

ただ今説明がありました。何かご意見やご質問はございますでしょうか。

(相馬委員)

企業の経営者の立場から発言させていただきます。

私どもの会社は、ガソリンスタンドやフィットネスクラブ、ドラックストア

といった小売部門において店頭に立っている社員が多くおります。その社員たちの夢が何かというと、自分の子どもが少しでもステップアップして、できたら進学高に入って国立大学へ行って、公務員になって安定した生活を送ってもらいたいと願っています。佐久地域に150人ほど社員がおり、何人かはその夢を実現させていますが、子どもが県外に行ってしまうと帰って来ないという者も中にはおります。

前回も少しお話ししましたが、私の会社は長野にもお店がありまして、私自身、長野で子育てをしました。上の娘は、長野の昔女子高だった高校に行きました。家の母方は長野なので、曾祖母も祖母も母もみんな同じその学校を出たので、入ってくれてありがとう、良かった、となりました。しかし、その時にはもう共学になっており、昔の女子高ではありませんでした。

次に下の娘は、塾に通わせまして、昔男子校だった高校に入りました。すると、お宅のような女の子が進学校に来ると男の子が入れないとPTAで言われました。こんなことは本当にくだらないうことかと思えます。

実際、子どもたち将来とは何か、ささやかな親の希望は何か、そういうものが目の前にないと、大学に進学させるには他地区の進学校に行かせないといけなくなってしまう。そうってしまった場合、親がこの辺りで普通の仕事をしていて、そこまで通う経済的な負担ができるのか、また、進学校に行かせるために皆が塾に通わせることができるのか。特に南佐久は中学生が学習するインフラが少ないと思います。そのことから是非、この地域に進学校を残していただいて、伸びる可能性がある、入学時の点数は低めでもそこから伸びるような、そんな進学校を佐久に残すことが大事だと思います。進学校がなくなると、経営者の立場から人を確保していくという意味でも、非常に難しい状態になってしまうのではと思います。

(柳田座長)

ありがとうございました。

学力を伸ばす進学校を残してほしいという意見でございますが、意見提案(案)の中ではどのように書き込まれているのか、事務局から説明をお願いします。

(事務局 若林佐久市企画課長)

6ページの「普通科」のところに、「より高い学力の習得を求めて他地区や私立の高等学校への進学を選択している中学生も多いことから、そういった将来の進学の希望に応えられる高等学校」と記載し、公立としてこういった高校を置いて欲しいという意味を込めております。

(相馬委員)

書いていることは間違いなく、そういう意味なんだと思います。

しかし、現実問題としてゆとり教育が進んできた中、例えば教科書にあることだけやって、部活動をしてでは、おそらく進学校に進む学力が付かないという実態があると思います。そのため塾に行ったり、通信教育を受けたりして勉強をして、学校の教育プラスアルファをすることで進学校に行ける。これは他の地区の進学校に行くにしても同じような現状だと思います。

(柳田座長)

子どもの将来の進学希望に応えられる手法はいくつかあると思います。相馬委員さんとしてはその手法についてということでしょうか。

(相馬委員)

今の中学生は、能力はあると思いますが、勉強をする機会にあまり恵まれていません。勉強をする機会を与えるのか、それでも入れる進学校を作り、入ってから鍛えるのか、そういうことが必要かと思います。全県下で高校入試の時点の偏差値で切っていくと、佐久地域は下のほうになってしまうのではと感じます。

(柳田座長)

そういった視点も大事かと思います。他にもございますでしょうか。

(掛川委員)

将来の日本がどのように変わっていくのか考えたときに、今から5年後の2025年は、昭和100年にあたる年となります。団塊の世代が完全に後期高齢者になり、社会保障の給付額は144兆円に達し、また、2023年には世界人口が80億人を超えると言われていています。

その中で、食糧危機は目の前に迫っていると考えております。私は食品スーパーを経営しておりますが、異常気象、今回の台風のような様々な災害も含めて、食糧問題が今後より大きな問題となっていくのではと考えております。

今、盛んにAI、ITと言われておりますが、人間の仕事はどこに向かうのか、AI、ITでは解決できない人間として生きていく時代、食が重要となる時代に私はなるのではと考えています。

特に、ITがここまで発達すると、勉強の場というのは、場所を選ばなくな

ります。すると学校の勉強は、すぐにチープ化し、動いている世の中の情報をITを使いウェブ上で知識を得て、独学で勉強していくというやり方も出てきます。

そのような中、私の仕事の面からお話しすると、実際の様々なマーケティングの考え方は、学校では勉強できないものだと考えております。実地における姿、経験、人から話を聞くといったことから学び続けることにより身につけてまいります。人間がこれだけ長寿命化社会になってくると、常に学び続けないと世の中に置いていかれますので、高校では、そういう時代に生きる力になる学びの「とっかかり」となる教育が必要なのではと思います。

先程申し上げたように、ウェブでは、様々な経験のある人の知識やデータを集めることができるので、これからは、そういった情報を自分自身で集めて学ぶ世の中だと思います。その中で人間の仕事をどこに見出すのか、というのは大きな問題だと思います。前回、「デジタルからアナログへ」という話をしたのですが、人間でしかできない仕事というのが何なのか、それを高校の中でどのような形で勉強していくのかということが私は大事だと思います。

だから私の社員も産地研修や、農家の新しい栽培方法など、新しいやり方を見たり聞いたり、常に仕事を通じて学んでいくことが大事なのではと考えています。学ぶことの「とっかかり」が高校では大事だと思います。

(柳田座長)

重要なお指摘だと思います。

他にもございますでしょうか。

(藤巻委員)

相馬委員も掛川委員も同じことを言われたのではないかと思います。まずは地域の学力を上げていくことが重要だと思います。ただ、当然大きな目標とはなりますが、「学力」イコール「いい大学に行く」ということだけではないかと思えます。例えば事業を起こそうとか、映画監督になろうとか、AIなどを導入して新しい農業をやろうと思うのも、ある程度学んでいないとそういう発想に至らないのではと思います。大学組かそうじゃないかという分け方ではなく、多くの子どもが学んでいかないと、これからの時代に対応していけるような人材は育たないのではないかと思います。

私ども軽井沢町には、県立高校の軽井沢高校があります。今まで町は、県立高校ということもあり、関わりが少なかったということがありました。高校再編という話が出て改めてということもありますが、高校の存在というものは非常に重要だということを感じております。そういう意味では、申し上げた学力

を上げていく、色々なことを考えられるようにしていく基礎学力をつける、ということで、町でできることとして、今年から公設塾を始めております。学習センターという名称ですが、町が手当てをして3人の若い優秀な先生をお招きしてスタートしたところです。現在、少しずつ生徒も増えており、22名が学んでおります。

また、軽井沢町は、北佐久郡の2万人の町ですが、色々な意味で期待をされている特殊な町でもあります。その中でずっと思っていたのは、大学がないということでした。しかし、私自身も大学を誘致するという事は現実的ではないと感じている中、一つの縁がありまして、東大、信大と町が、一昨年、連携協定を締結し、東京大学先端研究所と信州大学社会基盤研究センターで、町の課題を解決していくべく、教授も軽井沢町に常駐してやっていただいているところでもあります。効果としては、病院に新しい診療科を新設して医師を増やしていくといった動きも出てきております。

さらには、町内にはアイザックというインターナショナルスクール、高校となりますが、300人の生徒が世界80か国から来て学んでいます。この学校の方針だと思いますが、ただそこで学ぶだけでなく、地域に出て地域の人たちと交わり、軽井沢高校とも色々な形で交流を進めていただいております。

また、来年は風越学園という幼小中一貫校がスタートします。そういう意味では、非常に個性的な教育を施していこうとする教育機関や、グローバルな外国人もたくさんいますので、積極的にそういったところと軽井沢高校の生徒も交わって、様々な面での感覚を磨いていくということができる場だと思っております。

しかしながら、このようなまちづくりをしていっても、地元には高校生がいなくなってしまうと、いい意味での刺激を与える相手がいなくなることになりますので、高校が存続するという事は、軽井沢町にとっての生命線だと思っております。また、グローバルな感覚を養うという意味でもG7やG20において国際会議をやっているところに高校生も参加し、お手伝いをしながら、自分の町を見たり、外国人と接して国際感覚を身に付けていくということも行っており、高校の役割、位置づけを大切に考えているところでもあります。

(柳田座長)

今、二つお話がありまして、掛川委員からは、地域規模でも地球規模でも課題があって、そういった課題を自分自身で見つけていく力や課題解決する力、そういったものは学校でなく、自分自身で発掘していかないといけないという話がありました。

事務局として意見提案(案)の中で書き込まれているのでしょうか。

(事務局 若林佐久市企画課長)

5 ページの上段に、「さらに、自身の意思により、高度な知識や技能を自ら選択して深めていくために、特色があり」というところが、生涯学習的な学びの「とっかかり」の部分として入れさせていただいております。

(柳田座長)

掛川委員から見てのこの記載内容についてどうでしょうか。

(掛川委員)

常に教育の問題で感じるのは、中国のことわざで「馬を水辺に連れていくことはできるけど、水を飲むのは馬自身」というものがございます。意思というのかやる気というのか、何を勉強したいのか、ただ漠然とするのではなくて、目標をもってそれに対していく。我々もそうですが、人と話をする中で、違う意見がぶつかったときにアイデアが出てくることが多いと思います。

よって自発的というのか、何をやりたいかという目的意識のきっかけになるような場所で高校はあってほしいと思いますので、よりそこを強調していただければと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。

藤巻委員は、軽井沢高校を例に出されましたが、個性的な学習であったり、知の集積が進みつつある、そういったものとの連携や交流があることで、また学習意欲が生まれてくる、ということかと思えます。

他にも地域の中にある特徴ある学習環境、アイザックや風越学園、佐久穂町の小学校などの新たなものと連携する高等学校の機能というものは、意見提案書に書きこまれる必要があると思えます。

今日の会議は3回目となり、予定とすればこの中で意見提案をまとめるということになっていましたが、県教委としてもう1回を開くことは可能でしょうか。ただ今出ている意見を反映させるには必要かと思えますが、タイムリミットもあったかと思えます。県教委のスケジュールとして可能か、見解を求めたいと思えます。

(事務局 駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課教育主幹)

今年度中に再編整備計画の一次案を策定するというスケジュールで進んでおります。そう考えますと、各地区から意見提案を早めにいただき、それに基

づき最終計画を策定することとしております。

しかしながら、佐久地域におかれましては大きな災害がありまして、協議会の開催が延期となるなどの理由もありましたし、本日も様々なご意見が出ており、この意見提案(案)をより良いものにするためにも、こちらとしましては、1月の上中旬までに意見提案書の正案をまとめて提出していただければ、対応は可能かと考えております。

(柳田座長)

1月中旬ぐらいまでであれば可能、ということでもありますので、今、3つの意見が出ましたが、意見提案に加筆も必要かと思えます。事務局としては開催可能でしょうか。

(事務局 佐藤佐久市企画部長)

協議会の中でもう1回必要ということであれば、日程調整をさせていただきたいと思えます。

(柳田座長)

日程としては、今回で最後ということであったのですが、物理的にもう1回開催が可能ということですので、調整をして次の会議では正案としてまとめたいと思えます。

今日お出ししたものを柱としながらも、本日出された意見も反映させていきたいと思えますので、ご了解いただければと思えます。

～ 委員了承 ～

では、話を意見交換に戻しますが、地域の中の特色ある教育機関との連携ということは、意見提案(案)の中では触れられているでしょうか。

(事務局 若林佐久市企画課長)

地域の中にある教育機関との連携というものを直接記載してはおりませんが、地域の中で地域と連携していくというのは強くご意見としていただいていたところでもあります。

そのようなところから、8ページの(2)の「地域の活力を生み出す学校」という部分のところでは、地方創生ということも踏まえて、学校自体が地域振興の核になるということ、地域との連携、地域との連携による学びというものを様々な箇所で書かせていただいたという形になっております。

ここに足りない部分については、本日いただいたご意見について必要に応じて加筆はさせていただければと思います。

(柳田座長)

高等学校、中高連携、高大連携というものに留まらない、佐久地域にある教育の取組がありますので、そういったものとの連携も、特に軽井沢町や佐久穂町にも特徴的なものがいくつかありますので、それらを加味した文章が求められるかと思います。

他にご発言いかがでしょうか。

(藤原委員)

佐久地域の高校の将来像については、意見提案(案)において今までの意見を集約していただいているかと思います。

先ほど掛川委員さんがおっしゃられましたが、「人間は、臨終の朝まで学ぶべき動物である」という言葉があります。生涯学習、人間は生涯学ばなければならない動物であります。ですから、生涯学ぶ中で、故郷でどのくらいの時間を学べるのかということも大事かと思います。これは保育園から大学までずっと学び続け、その後も社会教育で生涯学び続けますが、故郷での学びの時間は非常に貴重な時間だと思っております。

その中で、県内に存在する大学との連携ということについて、9ページに少し記載があるだけで、もう少しこの辺りを強調すべきではないかと思います。

また、市町村との連携というのも一つの学びの場になるかと思います。その辺りもどうでしょうか。

(柳田座長)

事務局として書き込みについてどうでしょうか。

(事務局 若林佐久市企画課長)

確かに今言っていたとおり、高大連携というものは、以前堀内委員からもお話しいただいたところもありますので、触れさせてはいただいております。書き込みとして厚みという面ではもう少し厚く書くことはできるかと思っております。

また、市町村との連携という部分では、文章として市町村と連携という形では書かせていただいております。ですが、全体として地域との協働という部分の中で、包括的に入れさせていただいていると考えております。

いただいたご意見を踏まえて記載内容を少し考えさせていただければと思



います。

(柳田座長)

県内の大学というお話がありましたが、藤原委員さんの中で注目している教育の取組というものはあるのでしょうか。連携すると実りがありそうなものが何かございますでしょうか。

(藤原委員)

市町村が大学と連携しているところは相当数あるかと思います。しかし、学校と大学という組み合わせがどのくらいあるのかは定かではありません。

地域循環共生社会のようなことが世界的なテーマとなっていますので、単純に市町村だけでなく、大学だけでなく、あらゆる産業との連携も大事かと思えます。多様な人材を作るには、相当に幅広い中から選択して、選べる能力を作っていくかなければならないと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。他にございますでしょうか。

(両角委員)

藤原委員がおっしゃったとおりだと私は思います。少し例を挙げますと、私どもの地域にあります蓼科高校は、もうだいぶ前から地域の長野大学と連携をしております。その中で、歴史に基づいた「地域学」とこれから未来を見据えた地域力の強化を、大学の学生だけでなく、大学の先生にも直接指導をいただき取り組んでおり、大学生と高校生が一緒になって地域のものを作りあげ、その成果の発表も行っております。そこに私ども行政も絡んでいるということで、行政と大学、そして高校という中で進めてきております。

特に、地域の歴史という面では、故郷を思う子どもたちが増えてもらわなければ困るということが一つあります。都市部の大学に行ってしまうと地域に帰ってこないということがあり、地域力が落ちてきているということがあります。できる限り地域のことを高校時代に知っていただくことが、中山間地存立校の一つの強みになるもしれません。しかし、実際には生徒数が減ってきていますので、問題があると考えております。そういったことを意見提案の中には「手を携えて」という文言もありましたが、藤原委員からもあったように、もう少し市町村行政を前面に押し出していいただかないと、アクションができないかと思えます。その辺はお願いしたいと思えます。

それと、県教委の方もいらっしゃるのでお聞きしたいのですが、すでに関係

する地域の行政、高校そういったところが一体となっている地域の中で、県と手と手を携えるといっても、こちらとキャッチボールをしてもらえるような体制というものが無いといけないと思います。こういう時だけ集められて話し合いを持つというのは、もちろん大事なことでありますが、人口はどんどん減っていきますので、当然統廃合や学級数の減少というのは行われることもあるかと思えます。地域の中山間地存立校というのは、その地域になればその地域の繁栄がなされないと考えており、高校の消滅はあってはならないと考えます。その観点からも、少なくとも県と地元、これは、高校、行政含めてですが、日ごろからキャッチボールができるように、そういう体制づくりをぜひともこれからしていただかないとならないと考えております。何かあったときに、もうこういう体制にしますよと県のほうから示されて地域がついていくというわけにはいきません。そのところが地域の声を聞いてということに繋がってくるのではないかと考えております。その辺はどのように考えておられますか。

(柳田座長)

それでは県教委からお願いします。

(事務局 駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課教育主幹)

地域との関係の重要性ということでございます。こちらとしましても、持続可能な地域づくり、持続可能な高校ということでは一致しているかと思えます。両角委員がおっしゃった意見につきましては、承りまして、今後の政策の中で考え検討していきたいと思っております。

(柳田座長)

他にございますでしょうか。

(西部委員)

色々なご意見が出ていますが、全く持ってそのとおりだと思います。

その中、大前提として、まず1つ皆さんにお聞きしたいと思うことは、この意見提案(案)は、意見提案書にもかかわらず、読んでみると気持ちいいというのか、その通りだよねと思う文章が並んでいます。しかし、じゃあ何を提案して、何をしたいのかということがどこに書かれているのだろうと線を引こうと思ったのですが、ただとても甘いものを食べているような感覚になってしまいました。個人の感覚で厳しいことを言ってしまい申し訳ありません。

また、ご要望させてもらいました高校の見学へ、3校だけですが行かせてい

いただきました。おそらく数字上から統廃合の対象に上がるのではと思われる、定員割れをしている学校3つに行ってみりました。小海高校と軽井沢高校、蓼科高校になります。

軽井沢高校は、先ほど藤巻委員がおっしゃった軽井沢学習センターにおいて、地域おこし協力隊が頑張って授業をやってきていました。また、軽井沢高校の話としては、生徒と先生たちと地域の3者で作る軽高会議というのを40回もやっているとのことでした。

他にも色々ありまして、蓼科高校では、小中学生に情報を発信するというのをやっていた。そういったお話を聞いた上でいくつか質問をしてきましたので、それを踏まえていくつかの意見を申し上げます。

まず、「改革をするという希望がある中、この改革に伴って地域の人たちは、改革をサポートするというよりも、むしろ積極的に意見を言う地域の団体はありますか」と聞いてきました。皆さんどこに行っても白馬高校の話をするのですが、その中で、蓼科高校と軽井沢高校に関しては、やはり行政との協力の話が出てきました。例えば、「軽井沢高校だとそういった諮問機関ありますか」と聞いたところ、教育長を中心とした諮問機関を作るような話をお聞きしました。蓼科高校も、そういった地域でサポートする団体が作られているということでした。

その中、少し地域のサポートが弱いかなと思ったのは小海高校でした。小海高校は、先生たちだけで学校の3つの方針を作らされているのですが、県の方からこれでは駄目だと返されているそうです。先生の「上から目線」で書かれているといった理由だそうですが、切実に考えて学校内で喧々諤々とやっているのですが、学校の先生たちだけではどうしても限界があるとのことでした。地域の協力を得たいのだけど、地域の皆さんは学校がやりたいようにやればいいと思っている面もあったり、教育については直接関わってはいけないと思ったりしているようです。私も、市町村が県立の高校に直接関わっていくということには、若干の違和感を覚えていました。そういう意味でも、学校側の現場がすごく苦しんでいるという現状が垣間見えました。

先ほどの意見提案の話ですが、私としては、地域でも市町村でもいいのですが、その学校を支える学校以外の団体に対しての価値を、県教委側で高めていただきたいと思います。つまりそういうものを作らないと、学校の先生が県教委に何かを言うというのはすごく大変なのだと思います。極端な話、店長が社長に向かってこの営業は駄目だと言ったら、次の日から来なくていいよと言われる可能性があるのと一緒です。そういった面のハードルを県教委のほうで下げてもらいたいです。もう少し学校の先生たちが、自分たちの方針や地域の方針、市町村の方針を言えるような活動や方策をとっていただきたいということ

をぜひこの中に書き込んでいただきたいと思います。ある程度力のある地域の団体を作ることが重要であることは、皆さん分かっていることだと思います。分かっているけど動けないので、一つ背中を押してあげられるように、そこを強調していただければと思います。

また、地域に関して言うと、市町村が関わることがすごく多いので、市町村側と県のパイプを、学校経由のパイプだけでなく作っていただきたいと思います。極端な話、県のトイレの改修が間に合っていないところが結構あり、便器は変えたけど、壁はみんな昭和のままの学校があります。電子黒板を入れ終わった高校もあれば、先生が自前で持ち込んでいるところもあります。そういうことを考えると、仮に市町村が多少補助をしたいと思っても、その風通しがよくないとできないし、うまく運営もできないと思います。

あとは、残念な話ですが、高校3年生の授業を見たのですが、寝ている子がいました。それは寝てしまうと思うんです。就職が決まっていて、いまさら数学の勉強をしてもと思ってしまうと思います。そういう子たちに社会に出るための勉強、例えば国民年金の話とか、そういう色々幅を持たせて選択的に先生たちが必要だと思われる、地域が必要だと思われる授業をやるような仕組みも必要かと思います。今もあるかどうかは分かりませんが、そういう工夫のできる形で授業の弾力化、カリキュラムの弾力化を各学校にある程度与えるか、若しくは、与えてあるのであれば、それをより有効に利用できるような指導をするというようなことをぜひ県に望みたいです。その辺をぜひ検討いただいて、少しでも意見提案に入れていただければと思います。

行った高校では、みんな頑張っていました。部活もすごかったです。軽井沢高校も校長先生自身が卒業生ということで、とにかく熱い方が多くおもしろかったです。地域と地域の高校がかなり何とかしようと思っています。それは都市部の野沢北高校や野沢南高校、岩村田高校でも同じだと思います。結局この意見提案の内容を見てみると、全部残そうという話になっているので、それはそれでいいのですが、だったらそれをもっと強く言わないと、この意見は分かりました、では後は好きなように県が再編してしまうということになってしまい、この協議会をやった意味がなくなってしまうと思います。ぜひ強く押さないといけないところは強く押していただくようお願いします。

(柳田座長)

現場は意欲があるのだけど、なかなか声を出しにくい環境があるということでしょうか。

(西部委員)

環境というか、仕事柄仕方がないと思います。県も文科省に言われているとおりのカリキュラムの中でやろうとしていると思うので、その中で下から意見を言って、ボトムアップで変えていくのはなかなか難しいと思います。

また、そういった環境ですっと教員をやってきた人は、教員の職場しか基本的に知らないなので、おそらく新しい発想が出なかったり、こんなことやってはいけないと思ってしまったりだと思います。

その辺を柔らかくするために、県教委の側がある程度力があると思うので、手を差し伸べたらどうですかということです。

(柳田座長)

カリキュラムでということですね。

私自身、自治体の長として、市町村が応援しやすい環境ができていくというのは、一面的には良いことだと思いますが、職務分掌として、施設整備というのは絶対的に県が行うべきものです。これについて市町村がやりやすい環境を作るというのは、私どもからすればそれは県の責任でやっていただくことだと思います。これについて書き込むというのは、意見提案書の性格としてどうでしょうか。事務局として考えをお願いします。

(事務局 若林佐久市企画課長)

座長ご発言のとおり、意見提案は、地域の協議会として将来の高校のあり方についての部分となりますので、市町村としてこうしていくというものを入れ込むことは性格が違うかと考えております。

(西部委員)

分かりました。この話は馴染まないということで止めておいてもらえればと思います。

ただ一つ是非書き込んで欲しいのは、地域の連携を推進するように県教委が強く指導してくださいということで、そういった仕組みがないところもありますし、単なる協議会を置いているところもあるので、残したいのだったらと書いたらまずいと思いますが、地域との連携をとにかく推し進めて、地域の意見を吸い上げるように整えていただきたいと思います。やっていると思いますが、県側がもう少しうまくいくように意見要望をもう少し強く出してもいいのかなということです。

正直言いますと、私も佐久穂町の議員をしておりますので、行政の立ち位置は分かっているつもりで、例えば立科町がバスを出して、町民じゃない学生に

もそのサービスを提供するのはありなのかという議論はもちろんあると思います。ましてや、それが軽井沢町に至っては、交付税がゼロなのでお金があるからいいと言えるのか、佐久市はたくさん高校があるので同じようなケアは難しいといった事情があるとしたら、それは理解できます。それは、今後少しずつ変えていけばいいと思います。

地域の中には、市町村の負担が入っているという認識を少し県に持っていたく、おそらく現状でも、議会から強い反対を受けながら予算を出していると思います。それは、地域の人たちと議員さんで決めてもらえばいいのでそれはその地域に任せますが、そういう行動を、県として、地域の活動として認識して欲しいというところはあってもいいのかなと思います。

あと、別の話で、先ほど佐久穂町の話が出たのでお話しさせていただきたいのですが、佐久穂町にイエナプランスクールというのができました。現在70人ほど生徒がいるのですが、ちょっとした問題があります。地域のおばあちゃんたちは、「あの子たちいい子なのだけど、高校はどこに行くのだろう」と言っています。勉強をカリキュラム上でやっていないので、ペーパーテストを受けた時にどうなるのか心配しています。「何とかなるよ」と私たちは言うし、私たちより若い人も言うのですが、地域のおばあちゃんたちは心配でならないのです。もっと勉強させたほうがいいのではないかと、実はそういうところもあって、先ほどの小中連携、中高連携という中で、地域での選択肢が多様化するようなシステムがあってもいいのかなと思います。高校の中でもこういう子たちのニーズに沿った学習ができる高校が1校は必要になってくるかと思えます。それが私立になるのか、公立でやれるかは分かりませんが、そういった私立を含めた動きの連携は、ちゃんと書き込んでおいたほうがいいかと思えます。風越学園もそうですし、この地域独特の、中山間地に来ているからこそできる学習で、かなり人口流入にも役立っています。その辺ももう少し厚く書いていただきたいと思います。

(柳田座長)

ありがとうございました。今の地域との連携というところは、少し工夫をしていきたいと思えます。

あと、カリキュラムの柔軟性という話がありましたが、県教委のほうでカリキュラムの柔軟性という指摘の中で、西部委員さんもやっていると思うのだけど、という前置きもありました。ニーズに対するカリキュラムの柔軟性はどのようにされているのでしょうか。

(事務局 駒瀬長野県教育委員会事務局高校教育課教育主幹)

普通科や専門学科、総合学科というようなものがございますが、基本的にカリキュラムにつきましては、校内で検討し、子どもたちにどのような学びが必要かということ、まずは高校のほうで検討していただいて、県教委のほうでも検討するということになっております。

県教委のほうからこうやれ、ああやれという形ではなく、まずは学校現場からこういうやり方がいいのでは、こういうコースが必要でないか、といった議論が行われているのが現実かと思えます。

(柳田座長)

ありがとうございました。そんな現状も踏まえてお願いしたいと思えます。他にはいかがでしょうか。

(相馬委員)

先ほども申し上げましたが、私は経済人ですので、行政的なことはよくわからないところがあります。今、要するに負の連鎖、お金持ちは子どもに教育費をかけてその子どもはいい教育を受けられ、そうでない子は受けられないということがあるかと思えます。

商売をしていますので、日本中、様々なところに友人がいますが、長野県でも大きな町、小さな町がありますし、東京では進学期の子どもが相当数、海外の大学に進んでいます。それが意味、貧富の差、負の連鎖に繋がっていると思うのです。今のままでは、地方では、高校の次にアメリカの大学に行って、グローバルな友人を作ってくるとか、将来グローバル経済の中で活躍するといったところには行きづらく思えます。もう少し日本の大学制度を変えないと、高校入試の制度、高校も変わらないと思えます。

地域のおじいちゃん、おばあちゃんが進学どうのこうのと言ってるのではなくて、一応私は経済人ですから、色々な人を見ているし、知っています。そういうことで比べれば、佐久というのは、全体的に学ぶ機会に恵まれていないと感じています。優秀な子どもはたくさんいるのです。だから負の連鎖というよりは、地域間の差の連鎖が起きていて、この地域からは、これからグローバルに活躍する人が出づらいというようなことになることを心配しています。その結果、グローバルな人材を必要とする企業に出て行ってしまったり、子どもにグローバルな教育をさせたいと思う親が子どもと一緒に東京に行ってしまう、他の町に行ってしまうとかいうことが起きます。そうしますと、私もローカルで仕事をしている人間は、働いてもらう人がいなくなってしまう。経済人の視点から見るとそういった心配がありますので、その辺をご理解いただき

たいと思います。

(柳田座長)

ありがとうございました。

他にございますでしょうか。

(由井委員)

この意見提案(案)の内容につきましては、十分色々なことを織り込んで、佐久地区の将来の高校のあり方ということではいいと思います。

ただ、私たちはここで話をすべきことが、こういう総論賛成的なことでもいいのかどうか、ここに書かれているような、佐久地域の高校が目指すべき理想的な将来像を目指すためにどうしたらよいのかということ、この協議会として具体論まで踏み込んで話をしなくていいのでしょうか。ここに書かれている高校の将来像について、将来はこうなって欲しいということは書かれておりますが、これを実現するためにどうしたらいいのかということはありません。

会社もそうですし、市町村もそうですが、戦後何十年も経って世の中は大きく変化しています。その中で、会社もどんどん変化し、市町村も変化し、当然のことながら学校、高校も変化していかなければいけないわけです。逆に言うと変化をしなければ世の中に取り残されるということです。そして世の中に取り残されているものに対して、これからの未来を背負う子どもたちが集まるかと言えば集まるわけがありません。ですから、この高校再編といったことは、世の中が変われば当然起こるべき話であって、変革を起こさなければ世の中の受け皿にはなっていないということになります。

私としては、現在の高校がそのまま存続していることが、変革だとは絶対に思わない、また変革が可能だとは思わないです。やはり変革を起こすには、何かそこにあるものをとりあえず壊して新しくするぐらいの気持ちにならないと起きないと思います。ですから、高校再編ということに関しては、前回小諸での動きの例が出ましたが、佐久市においても、当然のことながら、どこどこが一緒になるとか、そういうような形の高校の将来像を文書にして出すのであれば、その中で具体的なこともある程度触れていかないと、佐久地区は具体的に将来こうなるというものが見えないと思います。

ここにいる人たちだけでなく一般の方々、大勢の人たちに理解していただいた上で、佐久地区の高校再編ということを行っていかねばならないと思いますので、それにはこの意見提案の文書についてももっと具体的に踏み込んで、こうするんだということがはっきり分かるような文書にしていかないと、ここで議論している意味があまりないと私は思って聞いておりました。



(柳田座長)

具体論についての踏み込みというのは大変重要なことかと思えます。これは、この会議の設置についての段階においても議論となりました。

この意見提案の性格、あるいはまたこの会議体の役割という点について、もう一度事務局から整理をしていただきたいと思います。

(事務局 若林佐久市企画課長)

第1回目の協議会において、協議の進め方についてご議論いただき、ご了承いただいたと認識しております。

その中で、この協議会では、あくまでも学びの部分に重点化して協議を進めていくこととしており、今後、こちらの協議会で出た意見提案に基づいて、県のほうで具体的なものを出していくこととなります。

また、県から出すこととなる再編案に対し、佐久地域では小諸での議論が先行していることから、それを踏まえて県の一次分の再編案にエントリーしていくことをまず優先していくとし、この協議会においては、あくまで学びという部分に特化して協議することとしました。

具体的に踏み込んだところについては、県の本来の責任の中でより具体的な形として再編計画を出していくべきであり、それを受け、今後、地域のそれぞれの組織体の中で必要なことを議し、県に伝えていけるような機会を県教委にきちんと作っていただくという形をもって、こちらの協議会はまとめさせていただきたいと考えております。

そういう意味では、意見提案としてまとめるものは、具体的に踏み込んだものというよりは、具体的な学びのあり方ということで、委員の皆様にもご了承をいただいたと考えております。

(柳田座長)

少し私のほうから付け加えさせていただくと、本当の議論を詰めていった場合には、財政的な裏付け、人事権、あるいは高等学校教育への知見、法律との関係などについて、この責任は全て県にありますし、県教委において行っただくほかないのです。

その中において、この協議会が地域のどういった役割を担っていただくのがいいのかということで、県教委が本来的に行うべき具体論には踏み込まずに協議するという一方で進めております。

これは、市長会でも大変議論となった点でありまして、私が発言した経過もありましたので、私と市長会の会長である長野市長さんと二人で県教委の原山

教育長とお話をして、その作業については県教委がやることですねと、確認をして動き出してきているという経過があります。

そのような中で、各地域から出てくる意見提案については、それぞれ温度差が出得ると思います。それも是として県教委としてはこのような会議体を設置してほしい旨の要望がありましたので、このような形にさせていただいております。これは本当に意見が分かれるところだと思うのですが、そういう経過の中での当地域の協議会がなっていることはご理解いただければと思います。

他にございますでしょうか。

(吉沢委員)

一部では、この協議会を高校再編のための協議会と捉え、そのような報道もあるかと思えます。しかし、この協議会の名前のおり、「高校の将来像を考える地域の協議会」であって、回数は決して多くなかったかもしれませんが、極めて凝縮した貴重な意見が出てきて、このような学びのあり方に特化した形で意見提案をまとめていただいたのではないかと理解しています。

高校再編は、少子化なのでこの高校をどうするという話ではなくて、この地域の高校をどうやっていくかということで、幅広く議論がなされ、それをまとめていただいたのがこの意見提案ではないかなと思っております。

ただそう申しましても、世の中では、高校再編についてこの協議会はどのように考えているのかと問われたときに、それはこの意見提案のなかのあちこちに散りばめられていると思うのですが、その中でもとりわけ、7ページに「多様な学びの場」とありまして、都市部存立校と、中山間地存立校に分けて、今後に向けての方向性を打ち出していますので、この協議会としての考え方、提案がまとめられている感じがあるかと思っております。住民に対しては、この辺が答えになるかと思えます。

その中で、これまでの議論を聞いていて思ったのは、この意見提案の10ページに「おわりに」という箇所があり、その最後から3行目にいいことが書いてあります。「地域が望む具体的な声に耳を傾け」とあります。これは「おわりに」で言うてしまうのはもったいなくて、先ほどの多様な学びの中でも、両角委員からも具体的な話がありましたし、前回は小諸高校、小諸商業高校の統合についても具体的な話がありましたので、そういった具体的な声に耳を傾けていただくのは県教委かと思えます。できればこの7ページの「多様な学びの場」の中に同じようなニュアンスの言葉を、例えば「地域の意向を尊重して欲しい」とか、「地域の意見を踏まえて欲しい」など色々あると思うのですが、そんなニュアンスの言葉をここに織り込んでいただくだけで違うのではないかと思えます。

細かな方法は座長にお任せしますが、そんな検討をしていただければと思います。

(柳田座長)

ありがとうございました。  
他にございますでしょうか。

(浅沼委員)

全体を見て思うのは、おそらく制度内の中でどうしようかという議論、まとめ方になっているかと思います。子どもが楽しく有意義に学べる知的な話でまとめられていると思うのですが、地域の協議会でありますので、制度内でなくて、いくらかはみ出た意見も必要かと思います。

2点、具体的なものを入れてもらえればと思います。6ページにあります総合学科、佐久平総合技術高校は、実は全国的なうまい米作りで優勝しております。全国1位というのはものすごい話です。今年も同じ臼田キャンパスがうまい米作りで最高金賞を取っていて、これは本物だなと感じています。技術レベルはかなり高いので、そういった高校が、佐久平技術校に限らずに、小諸高校の音楽科もあります。全国で1位を取るようなところは、例えば信大の農学部には無試験で入れますとか、東京芸大に無試験で入れますといった枠取りを、是非県教委でとっていただいて、うちの高校でこういったことをやれば大学に無試験で入れますよというようなことができれば、高校のレベルもかなり上がるのではないかと思います。

それともう一つは、先ほど進学の話が出ておりましたが、この佐久地域にも私学ではありますが、県立の6年制の中高一貫校があってもいいのではないかと思います。芸術といったことは3年間で磨けるわけではないので、中学時代から入れるような6年制のシステムがあってもいいかなと思います。理数科でも、英語といった特殊科目でも構わないと思います。制度外的な言及も、この意見提案の中で必要かと思います。

(柳田座長)

ありがとうございました。  
他にございますでしょうか。

(掛川委員)

同じようなことですが、県には試験場がいっぱいあるかと思います。醸造試験場とか、農業関係の試験場、そういう人たちの知見を利用する学科があって

もいいのではないかと思います。いわゆる発酵学、長野県には漬物文化があるわけですし、味噌、醤油、それから色々な食品加工の方法、新しいバイオも含めて何かそういう長野県の試験場の人たちを先生として活用できないかと思えます。

これからA IとかI Tの活用が進むのであろうと思いますが、逆に人間でしかできない分野、そういう部分がこれから大事になっていくのではないのでしょうか。農業も含めて、農産物の加工、リンゴもそうなんです、生食用のリンゴだけでなく加工用のリンゴ、加工食品が非常に注目されているということで、海外への輸出であるとか、そういうことも勉強していく必要があるのかなと思えます。ニュージーランドやアメリカもそういう方向に進んでいますので、技術者をぜひ高校の先生として活用できれば新しい学科ができてくるのかなと思えます。

(柳田座長)

掛川委員から試験場などの活用、例えば農業大学校も御牧原にありますので、そういうところとの連携というのがあるのかと思えます。

浅沼委員の発言には関心が高まったような気がしましたが、頑張った子どもたちが次の道に続いていくような制度というもののご提案でありました。農業、米日本一を2連覇というのは特筆すべきことで、伸ばしていく方法を制度として、この地域の学習の場の特徴としていこうというご提案だと思います。

この点もう少し掘り下げられればと思えますがどうでしょうか。

(伊澤委員)

そのためには、生徒に面白がっていただくことが是非必要かと思えます。

相馬委員や掛川委員がおっしゃったことと関係するのですが、そもそも学校というところは、考えること、学ぶことの面白さを教えるところだと思うのです。その面白さが生徒に伝われば、先ほどの「馬を水辺に」のお話にも関連するのですが、生徒たちが自発的に勉強してくれます。何事においてもそういうことだと思うのです。

佐久平技術高校は、北農と臼田高校などが合併してできましたが、そういった素晴らしいものを作る高校、それ自体を面白いと感じてくれる子どもさんが出てくると、おそらく自発的にそういった勉強をされていくでしょうし、生涯勉強する姿勢の土台を築くことになると思えます。

この場は、学びについてのマクロ的なあり方についてまとめる場ということですので、その枠内で発言させていただいているのですが、ぜひ学ぶことの面白さを伝える場というような文言を盛り込んでいただければありがたいと思

います。

(柳田座長)

事務局のほうで検討の対象としていただければと思います。

次回が最終回となりますので、これはもうタイムリミットとなります。皆さんの思いなどご発言あればお願いいたします。

(相馬委員)

私はずっと同じことを繰り返しているのですが、今の伊澤委員のお話に関連して、うちの社員の子どもに国立の医学部に進学した子がいます。もちろん共働きで、高校を出て進学したんですが、うちの会社でただ一人、医学部に行きました。鳶が鷹を産んだねと皆でからかったんですが、そういう素質を持った子どもはたくさんいますし、佐久病院さんのように全国に名が知れ渡った医療機関もあります。ですから、そういう才能を拾っていく場所を作っていけば、できれば帰って来て、地元で働いていただくとかそういう例もあるかと思っています。佐久の人間は賢い人間が多いと思っています。

(柳田座長)

ありがとうございます。佐久総合病院が再構築ということで、大変な医療体制の深化があったと思います。今、佐久市内で小中学生のアンケートを取ると、将来なりたい職業ランキングの中で、医療従事者、医者は必ず上位に入ってくる傾向に変わってきています。こういうことが実現できるようなまち、地域でありたいと思います。

皆さんいかがでしょうか、他にございますでしょうか。

(堀内委員)

委員さん方からもお話が出ていた生涯学習ということ、また、藤巻委員さんがおっしゃった大学の誘致は難しいというお話を聞いて、佐久大学の使命というのはとても大きいなと感じました。

大学であるということは、視野を広くするというところで、先ほどの基礎を学ぶと委員さんがおっしゃっていましたが、看護の領域の中でも、大学で学ぶということは、選択の幅を広げていくこと、将来の専門看護師や認定看護師、特定診療看護師だとか様々な分野へ広がっていきますし、大学院に行くとか、博士も看護系はたくさん大学院がありますので、そういうところまで学ぶ、広げていくことができます。

しかし、それが大学に入らなければできないかということ、看護学校、専門学

校からも大学院に行けるし、eラーニングもすごく進んでいます。学び方という意味では、大学を出るのも一つの生涯学習の選択の場であると思いますし、そうじゃなくても学びの場というのは、今社会的では準備されてきていると思います。

そして大学でも、経済力がないといい大学にいけない、私立は大変だと言われますが、国のほうも制度的に学費の補助などかなり進んでいて、うちの学校でも30%はいきませんが、多くの学生が国からの援助を受けられる、奨学金などが受けられるようになってきています。そういったところでは、学ぼうと思う時に学べるようになってきていると感じています。ですので、大学に入る18歳や、リタイアした人たちだけでなく、本学は、今働いている人がもっと学びたいというコースを作れば、もっと佐久地域で様々なことを学ぶ場が、他の大学や先程の試験場などと連携を取りながらできるのではないかなと思います。

私は、信州大学の農学部の委員会に出ているのですが、その委員会には、長野県の試験場の方も一緒に入っています。信大の農学部が長野県の試験場で色々なことをやっているように、本学の場合も様々なところと連携していく、教育機関だけでなく、高校とも中高連携、高大連携、大学が小学校まで視野を置いていく必要があると考えておりますので、誰もが自由に学べる雰囲気を作っていくというのが大学の使命として感じています。

また、文科省も実務家教員というものをすごく大事にしていまして、看護は当然のように実務家教員がいっぱいいるのですが、そうじゃなくて文系でも経済系でも実務をやった人を何割か、制度として何割置きなさいということはないのですが、実務家教員がいることはチェック項目になっています。そういう意味では、実践と結びつけた、地域と結び付けた実践ができる教育がすごく重視されてきています。学問的に高めていくということも、一方ではとても大事ですが、やはり、社会、地域の中で人々、人材を育てていく、作り上げていくということが大事かなと思います。

(柳田座長)

ありがとうございました。大学の立場からの大変な示唆をいただきました。他に何かありますでしょうか。

(藤巻委員)

相馬委員さんから、佐久地域には優秀な人材がいるとありましたが、全くそのとおりだと思います。学んでいこうとする土台、文化的な風土というのは、非常に大きな役割を果たすと思います。小諸、佐久というのは大変文化的な地

域ですので、そういうところから映画監督が誕生したり、作詞家、作曲家、宇宙飛行士といった方がいらっしやったり、そういうこととは関係がないことではないと思います。そういった文化的な風土があつてこそ、日本で、世界で活躍する人材が出ていくものかなと思います。

(柳田座長)

ありがとうございます。大変重要なものかと思ひます。

それでは他にご意見等なければ、本日は以上とさせていただきます。次回の開催日時について事務局から伝達できるようであればお願いします。

(事務局 若林佐久市企画課長)

日程につきましては、1月14日火曜日、13時30分から2時間程度ということをお願いしたいと思います。

正式な日程は、後日改めてご通知申し上げます。

(柳田座長)

委員の皆様には、ご予約をいただきたいと思ひます。

そして次回につきましては、意見提案としての確定をしていきたいと思ひております。微細な言葉や言い回しの変更は可能かと思ひますが、次回、大きな議論をすることは難しいかと思ひますので、事前に原案を事務局のほうからお配りをして、事務局のほうで意見調整を図って、議題がある場合は絞っていくこととしたいと思ひます。文言を決めていく会ですので、そのような準備をお願いしたいと思います。

全体を通じて何かご意見等ありますでしょうか。

ないようですので、今回のご意見を踏まえ、次回、第4回でまとめてまいりたいと考えております。よろしいでしょうか。

～委員承認～

4 その他

5 閉会